

ガーナでそろばんプロジェクト89号(2020年2月20日)

★★ 新しい年の課題 ★★

新しい年になり早くももう2月後半。サハラ砂漠から季節風が運んでくるハマトーンは例年十二月のクリスマス頃や年明け早々が一番ひどくなるのですが、今年は年明けのハマトーンがひどく更に二月に入って一月の時以上にたいへん厳しいハマトーンが五、六日と続きました。ハマトーンが終わる頃には土砂降りの雨が降ります。しばらく降っていないなかった恵みの雨ですが、その雨はまだ降っていないので土砂降りのは川のないところに濁流の川の流れを作るので苦手ですが恵みの雨を期待したいものです。一月のそろばん教室は私のビザ申請が関係してしまい1回のみの開室となっていました。その1回の開室は、これまで体験したことがない事案が発生しました。新年のそろばん弾き始め、私は新しい年の最初のそろばん教室という事もあり意気揚々と学校に向かいました。スクールバケーション中でまた新年始まったばかりとあって補習クラスは行われていなく学校の門は鍵がかかっていたので学校の目の前に住む校長先生の家に鍵を受け取りに行きました。これがきっかけとなってしまったのかわかりませんが、私が来て門を開けて校内に入れるとあつて校長先生の家の子どもがやってきたのです。これまでも校長先生の子どもの休みの時に教室で遊んでいることが多くあったので気にせずに行っていたのですが、どうも今回は様子が違いました。掃除をしている私のところによつて来て何か言いたげなのです。英語も日本語も通じない現地語しか話せない日本と言うなら未就学児です。私は、現地語しか理解できない小さな子ども二人に“そろばんやりたいの？”と日本語で問いかけました。“エエ”と現地語でイエスと答える二人。正直、私は面倒な子どもを

校長先生に押し付けられたと思いました。なので“えんぴつがないとダメ。持って来なさい。”と追い返すことにしました。実はこの時、一人はちゃんとえんぴつを持って来ていたのです。それを知っていながら二人とも返しました。絶対に戻ってこないことを信じて祈つて。ところが戻って来てしまったのです。初めからえんぴつを持って来た子どもはうれしそうにえんぴつを振りながら戻ってきたのです。もう一人はやはりえんぴつは手にしていませんでした。それどころかこの二人だけでなく人数が増えて戻ってきたのです。“勉強したいんだな。”素直にそう思いました。けれどそろばん教室に本来の生徒が来たら教えるのが困難になる。それ以前に物理的な問題で机が足りない。そう思いながら“そろばん教室の生徒が来るまで”と決め以前一分間の書き取りに使った横10、マス縦10、マスに線の入った紙を与えました。嬉しそうに数字を書く子どももいれば数字を書けない子どもは隣の子の書く数字を写しながら描いている。初めからえんぴつを持って来ていた校長先生に顔がそっくりな子どもは数字なんて書いてなく運筆の練習をするかのように丸を書くだけ。こうしたなか、普段は高校の寮生活を送るコンスタンス、パトリックが4年生になる弟のアントニーを連れやってきたので心なしかほっとしたのが本音なのです。しかし、その本音とは逆の思いで、こうしてやって来た小さな子どもも追い帰すのではなく“算数教室”として数字を書く練習をさせたり数をかぞえる練習をするのも必要なのでは？と反省しました。小さな子どもの算数教室は今年の課題になりそうです。報告 TOSHIO

協賛

トモエそろばん様

